

## 《書評》

# 『キャリアデザイン入門：自分を探し、自分をつくる』

古田克利\*著、ナカニシヤ出版、2019年

森 本 康太郎†

本書は、「大学で開講されるキャリアデザイン関連科目のテキスト」として執筆されている（ii頁）。著者は、大学での学びの目的は、第一に「学術的な知識の獲得をとおして、学ぶ意義を知ること」、第二に「学術的な知識を現実の問題にあてはめ、解決に活かす力を養成すること」にあるとしたうえで、キャリアデザインで扱う現実の問いは「私のキャリアをどのようにデザインすればよいか」というものであると述べている（iii頁）。その問いに答えるために、自己と組織を知り、それらを分析しながら自己のキャリアデザインを考えられるよう、本書は下記のような11の視点をChapterとして取り上げ、Part 1：自己、Part 2：組織、の二部構成としている。

### Part 1 自己を知るための五つの視点

Chapter 1 キャリアとは何か

Chapter 2 キャリアの転機

Chapter 3 キャリアで演じる役割

Chapter 4 私の人生の意味

Chapter 5 私の強み

### Part 2 組織を知るための六つの視点

Chapter 6 企業

Chapter 7 賃金

Chapter 8 継続的事業体

Chapter 9 就職活動

Chapter 10 人材マネジメント

Chapter 11 ダイバーシティ・マネジメント

Part 1では、自己理解を深めることを目的とし、キャリアの定義に始まり、スーパー、ホランド、シャイン、シュロスバーグといった代表的な職業・キャリア心理学者による理論が紹介されている。キャリア理論を紹介する書籍の多くが、理論が提唱された年代順に紹介することが多いのに対し、本書ではChapter 2でシュロスバーグのキャリアトランジション論から解説が始まっている点が特徴的である。これは、高校から大学、大学から実社会への移行を含めて、時間軸の上で自己のキャリアについて洞察を促すという授業目的に照らせば、効果的な配置であると思われる。また、アメリカで生まれた上記の理論を紹介するだけでなく、随所で著者自身の論考や視点を取り入れ（例えば、仕事の意味深さ、自伝的エピソード）、理論的守備範囲を広げる試みが行われている点も興味深い。Part 1の最後であるChapter 5では、リーダーシップ、マネジャー、コンピテンシーといったキー

---

\* 立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科准教授

† 大阪国際大学基幹教育機構准教授

k-morimoto@oiu.jp

ワードを、経営学分野の理論から紹介することで、Part 2への接続を図っているように見受けられる。

Part 1におけるキャリアに関する理論や用語の紹介および解説は、学術的な知識の獲得という大学での学びが目指すところと重なる。大学のキャリア教育科目のテキストとして作成されたなかには、学術的な理論解説が十分でないものも散見されるが、本書ではキャリアデザインに活かせる諸理論の入門書として、適切な解説が行われている。また、それらはキャリアデザインの過程として行う自己理解に適度な分量であり、自己の追究や就活用のテクニカルな自己分析への陥穽を避けることにも成功している。

Part 2は、職業理解を念頭に置いていると考えられるが、「組織を」知るための視点と題されている。ここには、職業を経営組織や会社という視点からとらえたうえで、キャリアデザインのために必要な理解を深めるという意図がみられる。浦上(2010)は、キャリア教育において会社や組織といった要素への言及が少ないことを指摘し、個人と社会の間における会社や組織の位置や意味を検討することの必要性を唱えている。多くの大学生が卒業後、企業組織に就職していくという事実を考慮すれば、Part 2の持つ意義は大きい。また、特筆すべき点として、第一に、財務や賃金といった経営において不可欠である「お金」と、個人が生活をするための原資である「お金」に関して、不足なく押さえられていること、第二に、Chapter 8の継続的事業体で、企業を出資者、目的、法律の各視点より分類・整理し、非営利組織にもふれて解説されていることがあげられる。これらは、自分のやりたいことを軸にした適職信仰を持つ学生に対して、職業選択に必要な視野を広げるための知識として有効であると考えられ、キャリアデザインを検討するうえで押さえておきたいポイントである。

上記の二部構成は、自己理解と職業理解という職業指導における必須要素であるが、加えて著者ならではの独自性も反映されている。それは、著者が大学での学びを、知識獲得によって現実を複数の視点からみることができるようになる点に意義を持つと述べているのと呼応するように、キャリアを複数の視点からとらえている点にある。例えば、Chapter 1にあるように、キャリアには客観的キャリア(外的キャリア)と主観的キャリア(内的キャリア)がある。これらは相互に影響し合っており、どちらか一方が単独で存在していないことから、自分の望むキャリアデザインを検討する際には、キャリアに対する複眼的視点が必要になる。あるいは、社会や人生に対するより深い認識と理解、人生におけるより幸せな選択を行うための「ものの見方」を獲得することが、キャリア教育を含めた大学教育に求められるものであろう。そして、この複眼的視点には、著者が心理学分野と経営学分野の両方において精力的に研究を行い、両分野を架橋する研究成果を生み出してきたことと、企業における実務者と大学での研究者として歩んできた著者自身のキャリアの経験が反映されている。ゆえに、本書はその独自性を十全に発揮しているのであろう。

このような特徴を持つ本書を、実際の授業で用いることを想定した際に、いくつかの課題もある。一つは、Part 2の最初であるChapter 6の内容が財務分析から始まる点である。もちろん、企業経営における財務の重要性を理解する必要があるが、企業とはそもそも何なのか、もう少し初歩的なところから解説してもよいだろう。いきなり財務諸表や財務分析を理解するには若干ハードルが高いかもしれない。そもそも会社というのはなぜ存在するのか、会社にはどのような部署があり、どう役割分担されているのか、といった基本的な事柄を押さえておくこと等が考えられる。また、Chapter 10の人材マネジメントやChapter 11のダイバーシティ・マネジメントは、重要な事柄で

はあるものの、自己のキャリアデザインをこれから考えていこうとする大学生にとっては、まだイメージを持ってないかも知れない。もちろん、こういった視点を学生時分から持つこと、就職していく社会で持つべき視点であることを知ることに意義はある。実際の講義のなかで、この段差を埋める工夫は必要だろう。もう一つは、Part 1、Part 2それぞれ単独でも相当の内容が含まれており、半期15回の授業で行うことはそれほど容易ではない点である。もっとも、これは本書の課題というよりは、大学における教養科目、共通科目としてのキャリアデザイン関連科目の持つ課題、限界かもしれない。

そのため、著者には本書の続編を期待する。本書を用いたキャリアデザイン関連科目を履修した学生のその後の学びのために、例えばキャリアデザイン実践、応用などとして、発展的あるいは実践的内容、詳しい事例研究、ワークシートなどが含まれたものである。多くの大学でキャリア教育科目は複数開講されていることから、需要も少なからずあるのではないかと。

また、本書が対象とする読者は大学生に限定していないが、本書は大学教員がキャリア教育に関する知識を得るための資料としても適している。2011年4月の大学設置基準施行以来、多くの大学でキャリア教育科目が開講されているが、キャリア教育に対する誤解は未だある。就職活動の促進や就職率の向上自体は否定されるものではない。しかし、伝統的キャリアの時代から、絶え間なく変動する社会に移行した現代において、主体的に自らのキャリアを発達・形成していくための姿勢や素養、知識、技術を涵養することが、大学のキャリア教育の本質である。この理解を促進するための資料として、本書は有効であろう。

ところで、大学におけるキャリア教育は、正課科目だけで担うべきものではない。川崎（2005）は、教学と事務部門とが密接に連携し、キャリア教育をキャリア形成支援の流れのなかに適切に位置づけることが最も大切であると指摘している。この点より、学生のキャリア形成支援、進路就職支援に従事する大学職員においても、教育的視座を得るために本書を活用されたい。キャリア教育・キャリア形成支援の目的は、あくまでも学生が自分の将来の働き方や生き方について考え、自らのキャリアを自ら決定していけるような力を身につけるところにある（川崎，2005）。この目的を持つすべての関係者に本書を薦めたい。

## 参考文献

浦上昌則（2010）『キャリア教育へのセカンド・オピニオン』北大路書房。

川崎友嗣（2005）「大学におけるキャリア教育の展開：学ぶ力と生きる力の教育」『大学と教育』41号，東海高等教育研究所，44-62頁。